

1 峠集落の記録

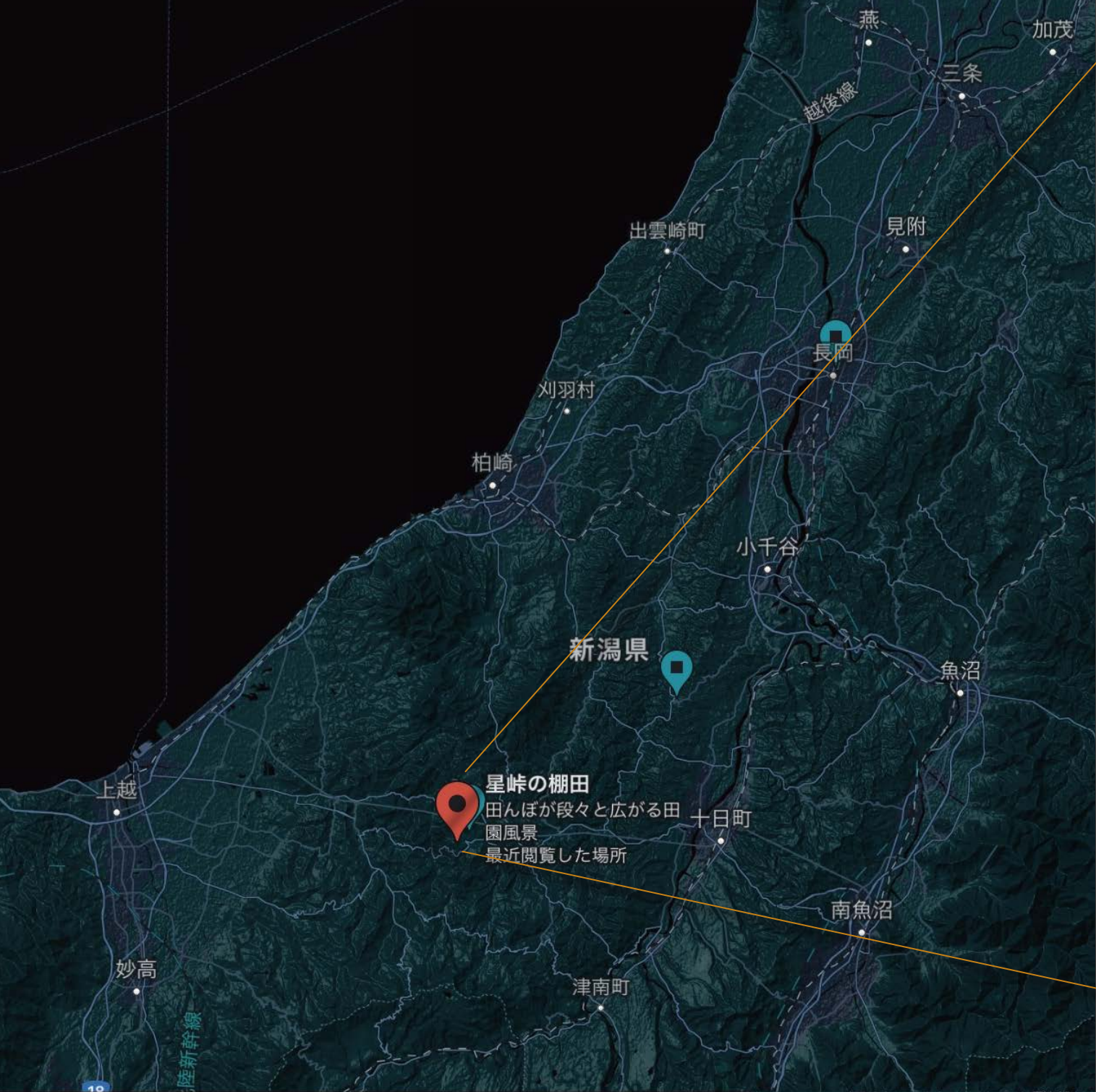


1 星峠

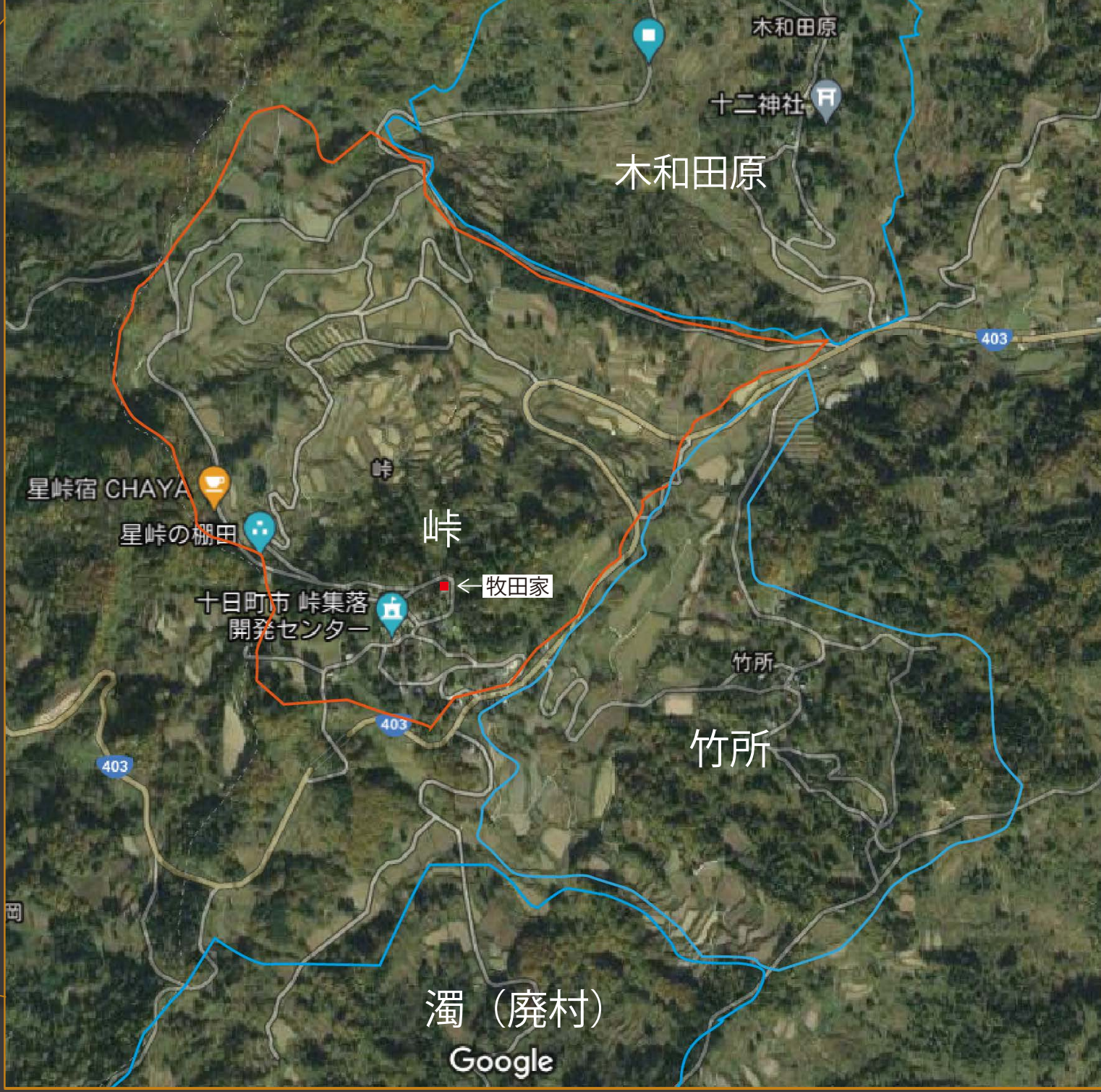
新潟県十日町市星峠。

大小様々な水田約 200 枚がまるで魚の鱗のように斜面に広がり、新潟県で最も人気のある棚田スポット。雲海が発生し、水鏡が輝くベストシーズンには、その美しい風景を眺めるべく全国各地から多くの観光客がこの地を訪れている。

峠集落の位置



周辺 3 集落



集落同士の性格の違い



峠の周辺には木和田原、竹所、廃村となった濁集落があり、過去にはこの 4 集落を校区とした小学校もあった。しかしお隣の集落同士ではあるが、その間には計り知れない溝が存在していた。

木和田原

非常に閉鎖的な集落。昔から地域イベントにすら参加しないなど外部の人間に対して排他的である。その影響もあってか棚田は放棄され、峠集落から 1 キロ先の集落ではあるが全く様相が異なる。

峠

外部の人間に対して寛容。移住者こそ少ないが棚田が観光地であり、住民の方も快く我々に接してくれる。

竹所

都市部からの移住者が近年増加。峠集落よりも先に外部の人間による地域再生が始まり、カール・ベックスさんを中心に多くの民家が建設されている。現在ではカールさんが区長を務めている。

濁

すでに廃村。住民は集団で引っ越し、別荘 2 軒と神社しか残されていない。

2 出会い

2021 年 6 月、私は十日町市で古民家を再生し地区全体で町おこしを図っているドイツ人の **カール・ベックス** さんのカフェに行くため十日町市松代地区へと向かった。残念ながら閉店の 15 時を過ぎてしまいお茶をすることはかなわなかったが、内部を見学させてもらうことはできた。元々旅館だったその建物は天井が取り払われ、ドイツ製の建具が採用されとても魅力的な空間に思えた。そしてカールさんが実際に設計を行っている竹所集落の民家を見学しに行ったその帰り道、棚田で有名な星峠へ行った。棚田を眺めていると、偶然にもそこにはオープン初日という小さなカフェが開かれていた。オーナーは **糸井貴志** さんという方で、話によるとカフェの建物はお手製で移動ができ、地元の群馬にある倉庫から牽引してきたものだという。ここでは地元のハイカラばあちゃん達がコーヒーを飲みながら話に耽っていた。私が滞在していた数十分の間にも多くの地元の方が軽トラなどで乗りつけオーナーと談笑しているのが印象的だった。



カールさんが再生した牛舎



糸井さんのカフェと民家



旧小学校



脱皮する家

3 住民の方への調査

峠集落を深く知るため、カフェオーナーの糸井貴志さんをはじめ、区長の山岸君代さんには峠集落の歴史をお伺いした。そしてケーススタディの住宅を提供してくれた牧田遜さん、正樹さんには家族の歴史を語ってもらった。



糸井貴志さん

星峠でただ一人、観光客向けのカフェやグランピングを営んでいる長岡造形大学の第一期生。現在、アシストメンバーとともに棚田が見えるソリーハウスを制作中だ。



山岸君代さん

峠集落区長。



牧田遜さん

糸井さんに紹介してもらった住民の一人。高齢のため昨年 10 月に上越市に住んでいる息子の正樹さんのもとへと引っ越した。



牧田正樹さん

牧田遜さんの息子。上越市市議会議員。峠集落の住宅で幼少期を過ごした。

4 糸井さんと区長さんのお話

昔は一軒につき一棟の牛舎があった

30 年前までは各戸に一頭は必ず牛を飼っており牛小屋もあった。牛は代掻きや移動用に使われており、育てた牛は新潟県中央家畜市場に出荷していた。およそ一頭当たり 30 万の値段になったという。過去には牛泥棒も多発し、区長さんの家の牛も盗まれたことがある。その時は牛を運び出した際の車のタイヤ痕があったため警察に通報したのだが、警察は街の人間であったため、牛に触ることも出来ず鼻紋も調べたが調査が進まず解決には至らなかった。峠集落では牛を全頭盗まれたことにより、借金を作り首をくくった人もいた。現在では牛を飼っている家はなくなり、竹所でカールさんが建てた牛小屋で牛を飼っているのみである。

棚田を管理するのはたった 10 人の住民

10 人の住民が星峠の棚田を管理しているが、今年 2 人田んぼをやめる。区長は現在 30 枚の棚田を管理しているが、引き継ぎ手がない場合「農舞台」の人達に管理してもらうとのこと。地域おこし協力隊の管理している棚田もあり、棚田バンクによってオーナーが新しく入った田が十丁ある。昔はかやぶき屋根の家であったため田の周りに萱場があった。今では観光地として開かれているが当初住民は観光地と思っておらず、外部の人間によるトラブルもあった。総務省からダムカードならぬ棚田カードを配れと依頼があったが、農家にそんな余裕はないため追い払った。観光地化されてからは BBC 等の海外の取材班も訪れるようになった。2021 年 9 月号の CasaBRUTUS でも星峠の棚田が掲載されているが、取材のときに徴収する撮影料が棚田に還元される。また、このような観光地化が住民の棚田を管理する義務感につながっているともいえる。耕作者がいなくなると 2、3 年でススキが一気に生え、元には戻らない。

過疎化は進むが空き家はない

40 年ほど前までは集落内に 54~64 戸の家があり、第二次世界大戦中には疎開により一時 72 戸まで膨らんだ。しかし、現在では 28 戸 52 人の住民が暮らし、そのうち 14 戸が 1 人暮らしのお年寄りが暮らしている。そのようなお年寄りにとっては毎週火曜日と金曜日に訪れる移動販売車が暮らしの頼みの綱である。街に出る場合は自家用車や車がない住民は集落から下へ下りて午前 2 回午後 2 回まわってくるスクールバスに乗る。観光地となっているものの、人口は流出する一方だ。航空写真を見ても地域の衰退は歴然であり、空き家も増えているかのように思えるのだが、実はそうではない。松代地域は豪雪地帯であり、古い家であれば雪下ろしをしないと家が潰れてしまう可能性がある。そのため家から出ていくことがあればあらかじめ家を解体する、もしくは人に譲ることが暗黙の了解となっていた。そのため峠集落や木和田原集落にはネガティブな理由により **空き家が少ない**。取り壊すとしても 4 千万ほどかかるためタダでも譲りたいという住民もいる。

「脱皮する家」は大工小屋を解体した材でつくられた

脱皮する家は日本大学の芸術学部が家全体を彫ることで、空家をアートとして脱皮・再生させた作品である。昔峠集落に住んでいたケンジさんという方が寄贈したものだ。そこから峠集落の観光地化は始まった。外部の人間を連れてくるきっかけとなったケンジさんは最初大いに迷ったそう。地域住民の方とのトラブルも経験し、昔は茅葺き屋根であったため、茅場から刈り取った茅を貸し合う制度があった。家を建てるときは 1、2 年かかるため大工が住みこみで働き、大工が滞在する大工小屋があった。大工小屋は近所で伐採した杉材が使われ、杉材は松材と違い、割れにくいため多用された。大工小屋が建てられ、建築された家は奥行き 8 間、横 12 間の総ケヤキの豪邸であった。家が完成した後は大工小屋が解体されたため、その材を使って屋号「豆腐屋」現在の「脱皮する家」が建てられた。そのため、訪れると不必要な穴が材に空いている。